島根県の砂防事業の第一歩を記す

大馬木川（おおまき）流域砂防事業

島根県の砂防は、明治 44（1910）年に那賀郡二宮村（現・江津市二宮町）において、山腹工（杭柵工、苗木植栽）に着手したのが初めといわれていますが、詳細が不明なため、現時点で砂防発祥の地は大馬木川とされています。

昭和 9 年 9 月全国的に猛威をふるった室戸台風では、島根県内の斐伊川、高津川流域においても被害が甚大でした。なかでも斐伊川水系大馬木川流域は、多量の流出土砂により川幅が蛇行型に 3 倍以上となり、一面が河原となるほど道路・橋梁の殆どが決壊・流失しました。特に、9 月 20 日の夜から翌 21 日にかけ、三成村（現・奥出雲町三成）では 278 ミリの雨量を記録、警戒水位 1.20 m の大馬木川では 21 日 6 時に 1.80 m の最高水位となりました。

特に被害が大きかった大馬木川は、原形復旧に止まらず全面的な改修工事となり、現地に「大馬木川改修事務所」が設置されました。昭和 10 年から大馬木川流域の荒廃渓流復旧のため、床固工を主体とした工事に着手、砂防事業の第一歩が踏み出されたのでした。また、大峠川・小峠川の下流を含めた砂防工法実施のため、長野県で経験済みの技師が派遣されました。昭和 14 年斐伊川水系山郡川で、初の土砂生産抑制の砂防ダムが建設され、現在に至っています。折しも、国鉄木次線八川奥部の工事が終末期であったこと、また石見方面からの人員も加わったことで、最盛期の就労人員は 700 人を超える状況であったと言われています。

斐伊川流域は、出雲風土記時代より「鉄穴流し」によって砂鉄採取が行われており、これが流域の荒廃を促したともいえます。建設省（現・国土交通省）では、斐伊川砂防第 1 次五箇年計画が策定され、昭和 25 年度より直轄砂防事業でダム工 5 基、床固工 3 基を完成させました。この事業で、最初の砂防堰堤が日登堰堤（アーカイブス参照）と大馬木川の砂留めのために建設された高尾ダム（アーカイブス参照）です。なお、大馬木川の砂防堰堤建設時に献身的な働きを行った佐佐木英一翁の顕功碑と島根県砂防発祥の地の記念碑が新市橋袂に佇み、先人の偉業を伝えています。

大馬木川の流路工

■位置図

島根県初の砂防事業（昭和 10 年、横田町大馬木川の流路工）【島根県　しまねの砂防ホームページより】

大馬木川新市橋下の砂防堰堤

大馬木川の砂防事業に邁進した翁を讃える「佐々木英一翁顕功碑」（右）と「島根砂防発祥の地」（左）と刻まれた石碑